

簡が出土したのは第一期に属する井戸SE九一四九である。素掘の井戸で、直径約二m、遺構検出面から井戸底部までの深さは一・五m以上。調査地北部に東に開く「コ」字状に並び立つ小規模建物三棟によって取り囲まれており、これらの建物に伴うものである。井戸埋土中より、飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する土師器、須恵器が出土した。木簡は堆積層下層の黒灰色粘土層から、木片、骨片、籠編物の断片などとともに三点が出土した（飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報）一五では井戸SE九一四七から木簡一点が出土したと報じているが、木簡ではないことが判明した。

8 木簡の内容・釈文

いずれも削屑の細片であり、釈読できない。

9 関係文献

奈良文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一五（二〇〇一年）

同『奈良文化財研究所紀要二〇〇一』（二〇〇一年）

（竹内 亮）

奈良・藤原京跡左京六条二坊・七条二坊

ふじわらきょう

- 1 所在地 奈良県橿原市高殿町
- 2 調査期間 第一一三次調査 二〇〇一年（平13）一月～四月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 黒崎 直
- 5 遺跡の種類 都城・集落跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代～鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

近世の溜池である「高所寺池」堤防改修工事に伴う事前調査である。藤原京の六条大路と東二坊坊間路の確認、左京七条二坊西北坪



（桜井・吉野山）

の遺構検出を目的とした主調査区に加え、池の北・東・西堤に計五カ所のトレンチを設定し、合計二〇八〇㎡を発掘した。

検出した主な遺構は、藤原期の六条大路と東二坊坊間路、左京七条二坊西北坪内の東西溝・井戸・掘立

柱堀・掘立柱建物、古墳時代の溝、鎌倉時代の石組井戸・土坑・溝などである。六条大路の幅に関して、これまで側溝心々間距離で二一m説と一六m説の二説があったが、今回の調査では一六・二mという数値を得ている。

木簡は、一三世紀後半の石組井戸SE九三二八から一点出土した。この井戸は、掘形上面で長径二・八m短径二・五mで、検出面から井戸底まで一・九mある。井戸底から高さ一・二m程は川原石を円形に積んだ石組みが残存していた。主な出土遺物は、瓦器などの土器類と木製品（曲物、柄杓、独楽などの未製品）である。

そのほか文字資料として、東二坊坊間路西側溝SD六〇三二Bから、飛鳥IVの須恵器杯B蓋の裏面に「大鳥評」と宛書きされたものが出土している。SD六〇三二Bは最大幅一・六m、深さは最も深いところで八〇cmある。浅い部分では下層に流水堆積があり、多量の土器が出土した。「大鳥評」土器もそのひとつである。須恵器の宛書文字には生産地の地名が記されることがあるため、この須恵器は大鳥評（後の和泉国大鳥郡）で生産されたものと考えられる。今回の木簡とは年代が異なるが参考までに記した。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「 」
・「 」

46×(11)×11 015

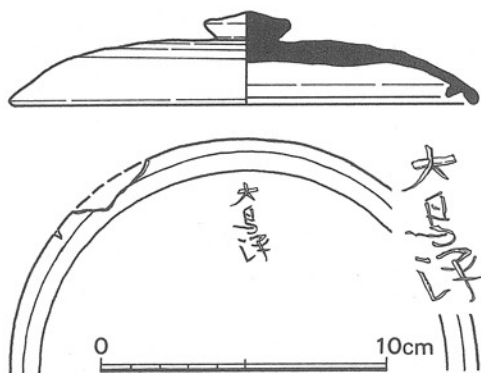
左割れ。側面に穿孔を施したものであるが、考課木簡の類ではなからう。

9 関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要二〇〇一』（二〇〇一年）

同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一五（二〇〇二年）

（市 大樹）



参考 「大鳥評」宛書土器